

2月4-5日の両日、万石浦の子ども支援が行われました。1月末からの寒波の影響で、あちらこちらで大雪情報が入ってくるなか、金曜日夜出発の支援隊は、移動にあたって「まずは安全を第一に」という合い言葉で出発しました。支援隊が万石浦サポートセンターに到着するのは、いつもであれば午前2時過ぎ。支援隊を待つ先発隊のもとに、「少し遅れる」という知らせが入り、到着は午前3時になりました。「氷点下11度の表示を見ました」という第一声に、この地の寒さを実感するとともに、ここで生き抜く人々の辛抱強さをあらためて感じることとなりました。



【かまくら】

1月末からの寒波の影響で、万石浦サポートセンターの周りにもたくさんの雪が積もって来ました。そこで早速始まったのが、かまくらづくりでした。まずは近くの雪を集め、もっと大きくしたいと隣の公園から、そして、もっと大きくしたいと、いつもサッカーや野球をするちょっと距離のある「アパコ（アパートの公園）」まで取りに行き、それはそれは大きなかまくらになりました。そのうちに、中にできるだけ人が入れるようにと、雪をかき出します。ある子は、かまくらの入り口の上に、目や鼻をつけて、まるで雪だるまのようなかまくらにしたりしています。この遊び？（作業？）は、4日に始まったのですが、5日まで続き、子どもたちは時間ができれば外に出て新たに手を加えて、かまくらはどんどん大きく、そして、いろんな形に姿をかえていきました。

そのような子どもたちの熱中する様子を見て、支援者の多くが思い出したのが、10月の「大きなシャボン玉をつくろう」という企画の時のことでした。大学生の企画で、事前実験の上に準備万端で望んだのですが、全くシャボン玉はできなかったのです。にもかかわらず、子どもたちは何とかシャボン玉をつくろうと、様々な工夫をして、長い時間を過ごすことができました。あのときは、大人のある程度のお膳立てがあつたことでしたが、今回は違いました。その場にあるもので、あるいはその場にあるものを工夫して使って、かまくらづくりにみんなが参加してきました。あれから4ヶ月、子どもたちはまた少し成長したように感じた2日間でした。

【スキー合宿の準備】

今回の支援には、大きな2つの目的がありました。一つは、2月末の北海道ニセコ町でのスキー合宿の準備です。冬休みの企画していた大阪合宿が、学校の3学期始業が早

まったことでできなくなり、それにかわるものとして企画されました。大きな心配は、夏休み修学旅行に行ったメンバーが全員いけるようになるかどうかということでした。それぞれいろいろ問題を抱えている子どもたちです。親たちとの交渉はうまくいくのか、それを案じながら、初日に「参加申込書」を配付しました。しかし、私たちの心配をよそに、翌日、子どもたちは全員が「OK」をもらってきてきました。こうなれば、弾みがつきます。たった1泊の短い合宿を無駄にしないようにと、スキーの堪能な支援者が、スキーの履き方について説明する時間を設けましたが、皆真剣でした。



今回の支援で、一番難しかったのは、スキー合宿に連れていくことができる人数をめぐって、子どもたちを「分ける」ことをしなければならなかったということです。みんな同じであることは、とても楽なことですが、費用的にもどうしても分けなくてはけません。一方で、夏休み以後、万石浦の支援には、避難所支援の頃には参加していなかった子どもたちも参加するようになっていました。夏以後に参加するようになった子どもたちは、避難所の頃から参加している子どもたちに比べると、場の雰囲気をつかんで仲間に加わることもうまくできる子どもたちでした。このような子どもたちが加わってくると、その子どもたちが遊びの中心をさらっていつてしまうことも見られるようになり、支援者たちには、弱く周辺化されていく子どもに加勢しながら、集団で遊べる力を、弱い子にも、そして、強い子にも、それぞれにつけていくような力量が求められていました。そのようなわけで、この日、夏休み以後から参加している子どもには、費用的な問題からスキー合宿に連れて行かれないことを説明することとなっていました。「分ける」必要を説明した時に、行かれない子どもたちの中には、目に涙を浮かべる姿も見られましたが、「この次の機会には必ず」という約束に、誰もが頷いて、それ以後も本当に一生懸命遊んでいました。小学3～4年生という小さい子どもたちなのですが、子どもたちは、そこに起きる出来事を真正面から受けとめる強さがあることを感じる場面となりました。

【お別れ会の準備】

今回のもう一つの目的は、3月末の「お別れ会」の企画を、子どもたちと相談することです。お家の方にも参加してもらっての昼の3時間を使ってのお別れ会です。話し合

い活動にもずいぶん慣れた子どもたちは、いろいろなアイデアを出すようになりました。お昼の食事には、どんな要求があるかと思っていると、「おにぎり！」といつものメニューが飛び出してきて、「中身はツナマヨと鮭！」というように、お昼を食べに戻らない子どもたちのおにぎりづくりを始めた頃の中身が飛び出して来ました。そんな中で、ホワイトボードに書かれた「3/25(日) 10:30-14:00」という表示をみて、「いつの3月25日ですか？平成25年でしょ～」という声があがりました。みんなの「??？」という雰囲気の中、気がつきました。そう、「さよならはもう少し先にしてほしい…」そんな願いの声だったのかもしれない。

【福島県富岡町学校支援】

富岡町立小中学校への訪問は約2か月ぶりとなり、工場跡地を改装した校舎の周りは、すっかり雪に包まれていました。9月の学校再開からおおよそ4か月、学校としての体裁は、徐々に整い、別棟を改装して新たに作った保健室も見せてもらうことができました。今回要望支援した物品の一つは鉄琴で、これも学校にあるべき教具として今の学校を整備するものの一つとして使われるものと言えます。一方で、次年度への不安が先生方の中には感じられました。今回届けた絵の具セットは、今年度だけでなく今後の子どものための家族の負担を軽減することを考えて「いくつでも」という学校の要望に応じたものでした。また、小学校の教頭先生は、「今のところ、来年度の新入生はゼロなんです。幼稚園に二人卒業生がいるのですが、親御さんはやはり『普通の学校』に通わせたいと思っていらっしゃるみたいで…」と話されました。『普通の学校』に通わせたい、これは親御さんの切実な思いでしょう。そして、親御さんにそのような選択を強いてしまう学校の現状を、先生方はどのような思いで受け止めていらっしゃるのかと思うと、言葉返すことはできませんでした。

校舎の外の片隅にある文部科学省が設置したという線量計を見せてもらいました。自動的に文科省に線量データが送られるものらしいのですが、業者が来て設置しただけなので、どのような仕組みになっているのか文科省から特に説明はなかったそうです。白い線量計は、地域の人々が一番知っていてしかるべき情報が知らされないまま、「普通ではない」ということを受け入れることを強えられるという原発問題の一つの象徴のように感じました。



【福島県大熊町立中学校の現状】

顕微鏡を提供した富岡町の学校を通じて、大熊町立中学校の理科の先生から顕微鏡の支援依頼があったのを受けて、38台の顕微鏡を車に積んで、初めて大熊中学校を訪問しました。大熊中学校は会津若松市内の、もともと使われなくなった学校校舎を市庁舎として使っていた建物の二階部分を校舎として使っていました。大熊町は、避難区域となった行政の中でも、いち早く4月16日に学校を再開した町です。以前富岡町の学校で、学校再開が遅くなったため支援物資を集めるのが大変だったというお話を伺っていたので、再開が早かった大熊町は物資の面

では富岡ほど困難はなかったのかも知れない…という予想は、実際学校の先生にお話を聞いてみて全く間違っていたことが分かりました。町は当初、一時帰宅の際に中学校の校舎の備品を運び込めるため再開の予算をあまり確保しなかったそうです。ところが、保護者から放射線に対する不安の声が上がりそれが実現できなくなったため、支援を集めることになったのですがなかなか集まらなかったとのこと、支援隊が案内された職員室の机はすべて中古の支援物資で、しかもそろったのは1月末だったとのことでした。理科の先生は、「子どもたちの教育環境が平等に保障されていない」現状を憂いておられ、他に物資が必要であれば…という支援隊の提案に、教頭先生は強い口調で「物資よりも、研究者の方に調査に来てほしい」と話されました。先生方の言葉には、現状が知られていない上に、このまま忘れられてしまうことへの危機感が感じられました。

「これで生徒一人一台の顕微鏡で理科の授業ができます」と先生は大変喜ばれていたのですが、原発事故が人々の生活や子どもたちの現実に何をもたらしたのか、私たちは本当に何も分かっていないということを痛感させられた訪問でした。

【支援隊活動記録（万石浦・福島） 1月23日～2月8日】

■石巻市万石浦子ども支援

○1月7日～8日（第20回）万石浦ライオン学校の2月支援

□支援隊メンバー：柿本隆夫（引地台中学校）、松永雅文（大和市特別支援教室）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、福島正彦・高柳恭介・本間一平（引地台中学校）、内藤順子・下新原なつみ（大野原小学校）、今井美里・大林沙紀・甘利悠貴・古浦新司（東京理科大学学生）、藤原弘輝（引地台中学校3年生）、大島史子（秋葉中学校）

■福島県学校再開支援

○1月31日（富岡町 第6回）

□支援隊メンバー 家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）

□物資提供：絵の具セット（20セット）、鉄琴（1台寄付、1台寄付より購入）

○2月3日（大熊町 第1回）

□支援隊メンバー 家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）

□物資提供：顕微鏡（38台）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資提供）

有本真紀（立教大学）－鉄琴1台、ト切堂－絵の具20個、顕微鏡38台－浜野顕微鏡

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

